

コア研究・長期プロジェクト研究
事後評価結果報告書

平成21年3月

財団法人東京都高齢者研究・福祉振興財団

東京都老人総合研究所

まえがき

東京都老人総合研究所では、平成 15 年度から、外部委員による評価の仕組みを導入し、研究の成果について厳正な評価を行い、その評価結果を研究所の運営に反映させ、研究の効率的推進と研究活動の活性化を図ってまいりました。

平成 17 年からは研究ビジョンを「サクセスフルエイジング（健康長寿）の実現」とし、グループ研究体制から組織改正されたコア研究体制と、個別の研究チームの枠を超えて研究所が一丸となって取り組む長期プロジェクト研究の2つの研究体制により、研究ビジョン達成のために研究を推進してきました。

この現行体制から、来年4月には、私ども老人研は東京都老人医療センターと一体化し地方独立行政法人東京都健康長寿医療センターとして医療との連携をさらに充実し、研究事業に邁進していくこととなります。

今回は東京都老人総合研究所として、これまでのコア研究及び長期プロジェクト研究の研究成果を専門的な立場からの評価をお願いしました。

委員の皆様方には、老人研の今後のために貴重なご意見やご助言を賜り、心から感謝いたします。

ご指摘いただきました点を踏まえまして自己改革の努力を一層積み上げ、今後の独法化後の向うべき方向を考えて研究を進めていく所存です。

都民、関連する研究者の皆様には、今後とも、老人研の活動に変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(財) 東京都高齢者研究・福祉振興財団

東京都老人総合研究所所長

井 藤 英 喜

外部評価委員会の実施概要

○ A系（自然科学系）

平成20年12月18日（木）

午後1時30分から

○ B系（社会科学系）

平成20年11月27日（木）

午前9時15分から

外部評価委員会 評価委員名簿

実施評価名	コア(A)及び 長期プロ(認知症)	コア(B)及び 長期プロ(中年)
学識経験者	後藤 佐多良(ごとう さたろう) 順天堂大学大学院客員教授	柴田 博(しばた ひろし) 桜美林大学大学院老年学研究科教授
	下門 顕太郎(しもかど けんたろう) 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科血流制御内科 教授	甲斐 一郎(かい いちろう) 東京大学大学院医学系研究科教授
	服部 信孝(はっとり のぶたか) 順天堂大学医学部 脳神経内科教授	田中 喜代次(たなか きよじ) 筑波大学人間総合科学研究科 人間総合科学研究科 スポーツ医学専攻 教授
都民代表	本多 昭彦(ほんだ あきひこ) 朝日新聞東京本社科学グループ記者	大和田 香織(おおわだ かおり) 毎日新聞生活報道センター生活家庭グループ記者
行政関係者	飯塚 美紀子(いづか みきこ) 東京都福祉保健局高齢社会対策部参事	
計	5	5

1 社会科学系チームの評価点一覧(5点満点)

順位	チーム名	リーダー	総合評価	研究成果	研究又はプロジェクト組織としての機能発揮度	成果の発表	普及・還元状況	今後の展開と方向性について
2	自立促進と介護予防研究チーム	本間 昭	3.5	3.8	3.75	4	4	3.75
1	社会参加とヘルスプロモーション研究チーム	新開 省二	3.75	4.2	4.25	4	3.75	4
3	福祉と生活ケア研究チーム	高橋 龍太郎	3.25	3.4	3.25	3.75	3.25	3.25

2 中年からの老化予防総合的長期追跡研究(第3期)の評価一覧(5点満点)

順位	チーム名	リーダー	総合評価	研究成果	研究又はプロジェクト組織としての機能発揮度	成果の発表	普及・還元状況	今後の展開と方向性について
		鈴木 隆雄	4.75	4.6	4.25	4.75	4	4.25

3 自然科学系チームの評価点一覧(5点満点)

順位	チーム名	リーダー	総合評価	研究成果	研究又はプロジェクト組織としての機能発揮度	成果の発表	普及・還元状況	今後の展開と方向性について
2	老化ゲノムバイオマーカー研究チーム	重本 和宏	4.2	4.2	4	4.2	4	4
2	老年病のゲノム解析研究チーム	田久保 海菅	4.2	4.2	3.8	4.4	4	4.2
2	老化ゲノム機能研究チーム	遠藤 玉夫	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2
1	健康長寿ゲノム探索研究チーム	田中 雅嗣	4.4	4.2	4.2	4.2	4.2	4.4

4 長期プロジェクト「認知症高齢者に関する総合研究」の評価一覧(5点満点)

順位	チーム名	リーダー	総合評価	研究成果	研究又はプロジェクト組織としての機能発揮度	成果の発表	普及・還元状況	今後の展開と方向性について
		丸山 直記	4.2	4	4	4	3.6	4.4

自然科学系（A系）報告

コア研究（A系）及び長期プロジェクトの事後評価について

外部評価委員会委員長

後藤 佐多良

コア研究体制は平成17年度から、“老化ゲノムの解明”（自然科学系）と“大都市高齢者の自立と社会参加支援策の開発”（社会科学系）の2プロジェクト研究として開始され4年を経過したが、平成21年度に研究所が独立行政法人に移行するため20年度で終了することとなった。本委員会は4年間の自然科学系コア研究の評価を行い（評価票に記載）、委員長としてこれを取りまとめたので報告する。

（1）研究成果について

・老化ゲノムバイオマーカー研究チーム：5つの研究チームが基礎研究を中心にした特徴あるテーマでそれぞれ新規の知見を得ている。基礎研究であるため直ちに応用/経済効果は期待できないが、今後臨床診断や予防法開発、さらに創薬を視野に入れた研究が期待される。しかしチーム全体の目標が明確でなく、テーマを絞り込んだアプローチが必要である。

・老年病のゲノム解析研究チーム：病院と効果的に連携し、ユニークなテロメア測定法の開発や充実したブレインバンクのリソースを活用し、老化の病理学的研究を推進した。 β アミロイド誘導遺伝子の研究は今後期待されるが、アルツハイマー病の研究は本研究所が単独で取り組むには予算・人力的に無理があると思われる。

・老化ゲノム機能研究チーム：糖鎖関連研究は世界的成果を上げているが老化との関連が明確でない。老化の本質に結びつく発展、さらには糖鎖異常を中核にした老化学説を提唱できるような貢献を期待したい。脳血流の加齢研究は基礎と臨床を繋ぐ進展がみられ、本研究所の生理学的脳機能の老化研究は特色があり継続を期待する。

・健康長寿ゲノム探索研究チーム：ミトコンドリアゲノム多型に注目したプロジェクトや線虫老化のユニークな視点の研究は独創的で興味深い知見を得ている。さらに高齢者の運動処方を提案する等、総じて本研究所に最もふさわしい成果を上げている。

・認知症高齢者に関する総合的研究：医学生物学や社会医学・フィールド研究さらに臨床研究まで幅広い分野で十分な成果が得られている。しかしコア研究と重複している研究もありプロジェクトとしての予算配分が不明である。得られた成果は今後認知症の予防・診断・治療および介

護に活用され経済的な効果をもたらすことが期待され、行政関係者に研究の意義を理解してもらうことも重要である。

(2) 総論

各チームとも外部資金の獲得を積極的に行い適切な研究展開をしている。研究成果の国内外への論文や学会発表は十分である。また講演会やマスコミを通じての普及・還元活動も積極的に行われている。しかし、都政への還元は未だ十分とはいえない。

一方、臨床研究チームを除いてチーム全体の目標が明確でなく各研究グループ間の協力体制も不明確である。来年度の独立行政法人化を機に、研究グループを再編し社会学研究チームや病院部門と連携して、テーマを絞り込んで研究資源を集中的に活用することが望まれる。

3. 成果の発表 5点 × 1名 4点 × 4名 平均 4.2点

- ・ 国際的学術誌への論文発表および国内外の学会での発表を通じて、よく研究成果の発信をしている。著書に関しては、分子老化バイオマーカーグループ以外は少ないが、成果の発表方法としてはそれほど重視すべきものではない。
- ・ 論文、学会発表の量質は十分である。
- ・ 報告書に記載されている論文数やプレゼン内容からは評価できると思う。
- ・ 米国科学アカデミー紀要など質の高い論文が多数発表されている。

4. 普及・還元状況 4点 × 5名 平均 4.点

- ・ 講演会や新聞テレビ等を通じて成果の還元、普及活動を行っている。
- ・ 学会等において専門家向けの発表を行うだけでなく、一般都民向け講演会・講習会や大学教育において普及を図っている。
- ・ 都の施策に対する還元は十分とは言えない。
- ・ 成果の普及活動は十分と言える。
- ・ 市民、都民に向けた情報発信が成されている。
- ・ 新聞などに取り扱われている。
- ・ 報告書に記載されている取材された件数などからすると評価できる。
- ・ 研究所全体でプレスカンファレンスを定期的に行うなどの方策がとられていない。

5. 今後の展開と
方向性について 5点 × 1名 4点 × 3名 3点 × 1名 平均 4.点

- ・ 各グループ研究は老化の種々の側面に関わるものであり、継続する価値があると思う。
- ・ 一方、今後の研究の方向性についてチーム内でお互いの研究についてその意義、アプローチなどに関して議論を深め、リーダーはそれを取りまとめる主導性を発揮してほしい。
- ・ 独法化にあたり、組織的に、研究目的を統一する等の整理、統合を図ることが必要である。チーム統一を図るよう今後は留意し、研究継続を続けてほしい。
- ・ 研究の必要性は高い。
- ・ 課題、方向性は適切と考える。
- ・ より研究成果を詰めていくうえでも継続はするべき
- ・ 取り上げられているテーマはどれも重要なもので、今後も本研究所で行うべき内容のものである。

6. 総合評価

5点 × 1名

4点 × 4名

平均 4.2点

- ・ チームリーダーの赴任間もない時期の評価で適切ではないと思われるが、今後リーダーシップを発揮した研究展開を期待したい。
特に加齢性筋萎縮はQOLやADLを損なう点で極めて重要な課題である。他のグループとの連携も積極的に進めてほしい。
- ・ 研究期間や予算規模に見合った成果を挙げている。
- ・ 総合評価としてテーマなど老化バイオマーカー検索のため重要と考える。
- ・ 成果も妥当と考える。
- ・ 普及には都民向けの講演会を年2回は開催して欲しい。
- ・ 07年10月から始まった筋肉と神経の機能を可視化する研究など、新しい動きも進んでおり今後の成果も期待できそうな印象を受けた。
- ・ どのグループも非常に質の高い基礎研究を行った。その多くが臨床応用可能なものであることも評価できる。

7. 評価を終えて

- ・ 各グループはそれぞれ良い研究をしているが、チーム全体の目標が明確でなく、不統一感は否めない。
研究所の独立法人化を機に、グループを再編成して絞り込んだ2, 3のテーマについてグループの特徴を生かしたアプローチをしてほしい。
基礎研究を行いつつ、ヒトの老化をより良く理解し、健康な高齢期を過ごすために役立つ展開を考えるべきである。
- ・ SODの部位特異的遺伝子改変マウスの作成など興味あるプロジェクトであるが、力仕事のプロジェクトを推進している印象を持った。スーパーオキシドなど生理的に必要と考えられるので単にROS消去機構だけでなく、薬の開発を視野にいれた綿密な計画が必要と考える。運動器についても加齢現象との関連性がはっきりしない。稀な疾患に焦点をあてているだけでは、老化との関連性を見出せない可能性がある。もっと加齢とプロジェクトの関連性が明確になるよう検討していただきたい。

老年病のゲノム解析研究チーム リーダー 田久保 海營	4チーム中 2位	総合評価平均 (5点満点) 4.2点
-------------------------------	----------	-----------------------

1. 研究成果 5点 × 1名 4点 × 4名 平均 4.2点

- ・ 病院での剖検・生検という実務をこなしながら優れた研究を展開している。
- ・ 研究面では、とりわけ染色体と組織切片上でのテロメアの検出定量をユニークな方法を開発して行い、高齢者のがん増加の原因に迫る知見を得た。
- ・ 高齢者ブレインバンクは国内では他に類がない貴重なもので研究試料として価値が極めて高い。
- ・ βアミロイドで誘導される遺伝子発現の研究はアルツハイマー病態との関連解明など今後の展開を期待したい。
- ・ 経済的波及効果は病院との連携で十分発揮されている。
- ・ テロメアの短縮と、ガンの発症メカニズムについて、高齢者のがんの解明に係る成果があった。
- ・ ゲノム神経病理の達成度は100%とあるが、28種類の遺伝子の中で、5種類の発現変化が神経変性に関与していることが推定される。ただ単に遺伝子の変化を見出したに過ぎず、達成度は責任者が思っているほど高いとは言えない。テロメア長の測定は寿命を考えると重要なプロジェクトである。ただテロメア長の研究は、いろんな研究室から報告されており、更なる解析が望まれる。
- ・ 学術的な知見は、独創的な面から考える知見が得られたと言える。
- ・ 経済効果を期待できると考える。しかし、まだ経済効果を期待できるほど成果は出ていない。
- ・ 外部評価結果が研究の進捗に活用されたか分からない。
- ・ ヒト組織のテロメアが加齢によって必ず短縮することの検証は評価できる成果と思う。ブレインバンクの成果はまだプレゼンではよくわからなかったが、蓄積してきたことで今後に期待が持てる。
- ・ 臨床検体を用いたテロメアの研究では多くの貴重な知見が得られた。
- ・ ブレインバンクは貴重なリソースであり、これを利用して有益な知見が得られた。
- ・ 潜在的には今後の経済的波及効果は大きいものと考えられる。

2. 研究又はプロジェクト組織としての機能発揮度 4点 × 4名 3点 × 1名 平均 3.8点

- ・ 外部資金の獲得を積極的に行い、適切な研究展開をしてきた。
- ・ 臨床系グループは他部門との協力をよく行っている。
- ・ 全ての研究員が獲得する等、外部資金獲得を積極的に行っている。
- ・ 兼務研究を行う等、老人医療センターとの協力を行っている。
- ・ 効果的な運営であると考ええる。
- ・ 他部門との連携協力は得られていると考える。実際、メンバーは診療にも携わっている。このことは臨床面からのサポートと基礎的な研究の理想的な運営と言える。
- ・ プレゼンや報告書からは評価できると思う。
- ・ 病院業務を行う医師、歯科医師がメンバーの多くを占めており、他部門との連携は図られているものの、部門の各プロジェクトが有機的に関係して運営されていたとは言えない。アルツハイマー病の研究は、本研究所が単独で取り組むには予算的にも人員的にも無理があり、大学や国内外の研究所と連携し国家的な枠組みの中で研究を進めるべきである。

3. 成果の発表

5点 × 2名

4点 × 3名

平均 4.4点

- ・ 多くの論文を発表している。特に非分裂細胞からなる脳、心筋のテロメア長が寿命と相関するという興味深い知見を得て、世界的に高く評価され、質の点でも優れている。
- ・ その他、テロメア長との関連を中心にがん化と老化に関する多くの優れた研究を展開してきた。
- ・ チームリーダーの田久保研究部長が食道がんに関する英文著書を刊行した。300ページを超える力作である。
- ・ ブレインバンクグループは凍結脳試料の作成と維持という業務をこなしながら、多くの研究業績を上げている。
- ・ 論文、学会発表の量質は十分である。
- ・ 田久保研究部長が、英文による食道がんに関する著書を世界に向けて発表したことは、老人研の名を広めることにもなり評価できる。
- ・ 特許出願を積極的に行っており、特許登録されている実績もある。
- ・ プレゼン内容からは十分評価できる。
- ・ 多くの英文論文に成果が発表されているが、インパクトの高い論文は多くない。

4. 普及・還元状況

4点 × 5名

平均 4.点

- ・ 都の広報誌や講演などを通じて研究成果の公表を行っている。
- ・ 研究テーマである認知症やがん、生活習慣病など高齢者に多い病態について機会を捉えて都民への教育を行っている。
- ・ 田久保部長が知事賞を得る等、都政に貢献している。
- ・ 高齢者にも関心が高いがんや生活習慣病などについて都民への情報提供を適切に行っている。
- ・ 都の施策の成果の還元は十分成されている。
- ・ 適切に成果を普及している。
- ・ 一般都民への情報は十分とは言えない。
- ・ マスコミに対しても十分とは言えない。
- ・ プレゼンで成果が示された割には広く情報が伝わっているという印象はあまり感じられなかったが、プレゼン内容や報告書から判断すると一定の評価ができる。
- ・ 都民やマスコミ向けの情報発信は、研究者レベルではなく、研究所の管理部門が中心になって行うべきである。一般にアピールできる内容が多く残されていると思われる。

5. 今後の展開と
方向性について

5点 × 1名

4点 × 4名

平均 4.2点

- ・ 特にがん化と老化の問題、ブレインバンクの充実とそれを利用し他研究は都民が健康な老後を過ごす上で重要な貢献をすることが期待されるもので独法化後も継続する価値の高いものである。
- ・ 本チームはヒトを対象としている研究が多いが、動物実験中心の他のチームとの協力を一層発展させてほしい。
- ・ 基礎研究もやがては実学へと発展する可能性を秘めていることを考えると、地味なものでも継続すべきである。
- ・ 老化との関連が深い生活習慣病の研究も重要な課題であるが、リーダーの退職で中断せざるを得なかったのは惜しい。何らかの形で継続されることを期待する。
- ・ 都民のより豊かな生活を実現するための、がん、老化に関する研究であると考えてるので、独法化後も継続すべきである。
独法化による一体化のメリットを生かし、より一層病院部門との連携を図ってもらいたい。
- ・ 継続の必要性は、高い。
- ・ 今後の方向性もしっかりしている。適切と考える。
- ・ 内容的に研究の継続性は必要。ブレインバンクでのイメージ化したデータバンクの計画など今後についても示されていた。
- ・ 高齢者ブレインバンクについては本邦では最大のリソースで今後もその整備と国内外の研究者が利用できるように整備していく必要がある。
その他のプロジェクトに関しては、非常にユニークである、あるいは我が国で最も優れているとは言えないが、活発に研究がおこなわれており継続が望ましい。

6. 総合評価

5点 × 1名

4点 × 4名

平均 4.2点

- ・ 優れた研究を展開しながら期待される都民への還元も行っている点で高く評価できる。
- ・ こうした部門への適切な予算、人員の配置に配慮してほしい。
- ・ 担当研究員の退職により生活習慣病の研究という重要な研究を継続できなかったのも、今後は、その専門分野の研究員を招聘する等の対策を講じ継続していただきたい。
同様に、リーダー退職後も、研究を継続できるよう、予め対策を取っておくべきである。
- ・ 総合評価は、論文発表など高いと判断する。
- ・ 妥当な成果が得られていると言える。
- ・ 普及に関しては、十分とは言えない。もっと神経病理の必要性を啓蒙して欲しい。
- ・ 予算規模についての判断はできないが、総合的に評価できる。
- ・ 限られた人員、予算の中で標準以上の研究を行っていると言えらる。

7. 評価を終えて

- ・ 病理学は老化研究の要であり、独法化後も本研究チームは重要な貢献をするであろう。病理学的研究成果から基礎研究の課題が生まれ、他のチームで発展することを期待する。
- ・ 論文発表など精力的に活動していると言える。問題点に関するコメントして、同定した分子に依存していることは理解できるが、研究を推進する上で他力本願的姿勢は賛同できない。あくまでもあらゆる方法を駆使して、進めるべきである。

老化ゲノム機能研究チーム リーダー 遠藤 玉夫	4チーム中 2位	総合評価平均 (5点満点) 4.2点
<hr/> 1. 研究成果 5点 × 1名 4点 × 4名 平均 4.2点		
<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究目標はおおむね達成していると考えられる。 ・ 優れた学術的知見を得て、学問の進歩に貢献した。特筆すべきは筋疾患に関わる糖転移酵素を発見したことである。今後、こうした成果が老化研究の本筋へと発展することを期待したい。 ・ 難病である筋ジストロフィー原因遺伝子の制御機構の解明や神経筋肉、腎障害、肺気腫、AD等多岐に亘る病態解明に繋がる手がかりを得るなど多くの知見が得られた。 ・ 達成度は高いと言える。但し、老化というテーマの一致性には疑問を感ずる。フクチンの研究成果は、朝日賞受賞に繋がっており、大きな成果と言える。しかしながら、老化というテーマとフクチンの糖鎖関連分子との展望が十分とは言えない。 ・ 学術的な成果は十分と言える。 ・ 経済効果は十分とは言えない。 ・ 外部評価結果の活用は不明である。 ・ プレゼンではどこからどこまでが最新の研究成果かが明確でない印象も受けたが、長期運動とコリン作動系の関係の研究など、基礎と臨床をつなぐ研究成果の進展が興味深かった。 ・ 筋疾患に関する糖転移酵素を発見するなど、糖に関する生物学の分野で、著名な成果をあげた。 		
<hr/> 2. 研究又はプロジェクト組織としての機能発揮度 5点 × 1名 4点 × 4名 平均 4.2点		
<ul style="list-style-type: none"> ・ 外部研究資金の導入を積極的に行い、研究成果を上げた。 ・ 研究所内外の研究者と活発な共同研究を行っている。 ・ 研究予算との効果については問題ないとする。 ・ 連携については十分とは言えない。 ・ プレゼンからは連携は十分とれているという印象を受けた。 ・ 他の部門や国内外と研究者との連携がとれていた。 		
<hr/> 3. 成果の発表 5点 × 1名 4点 × 4名 平均 4.2点		
<ul style="list-style-type: none"> ・ 多数の論文および学会発表を行い、著書も多数刊行し、質的にも量的にも十分な実績がある。 ・ 論文、学会発表の量質は十分である。 ・ 論文発表、学会発表、著書ともに十分と言える。 プレゼンや報告書からは評価できる。 ・ 発表された論文は質、量とも優れている。成果に対して多くの学術賞を受賞している。 		

4. 普及・還元状況 5点 × 1名 4点 × 4名 平均 4.2点

- ・ 公開講座、講演会などを通じて都民教育にも力をいれており、研究成果を都民に知らせることに努めている。
- ・ 脳血流の加齢変化と改善法の研究、学習記憶能力への運動効果の研究など基礎と実践の双方に関わる研究は、都の施策にもよく合致しているといえる。
- ・ 一般向け講演、研究室見学受入れ等、都民に対する普及に努めている。
- ・ リーダーが、ノーベル賞受賞者を多く輩出している朝日賞を受賞した。
- ・ 施策に関する成果は十分とは言えない。積極的な提案に関しても十分とは言えない。
- ・ 成果の普及に関しては十分とは言えない。
- ・ 積極的な普及活動を行っている。
- ・ マスコミにも取り上げられている。
- ・ 研究の細かな点については都民に広く情報発信するのは難しいが、運動と老化の関係などについて公開講演会などでの取り上げられ方は評価できると思う。
- ・ マスコミにも多く取り上げられ、本研究所の存在価値を一般都民にアピールした。

5. 今後の展開と方向性について 5点 × 1名 4点 × 4名 平均 4.2点

- ・ 高齢者の筋萎縮に注目した研究は極めて重要だが、同様の方向性をもって研究している他のチームとの共同研究を通じて、相互の研究成果の関連を理解する努力が必要だと思う。たとえば、タンパク質の糖鎖修飾が加齢による筋萎縮、すなわち筋タンパク質の分解亢進あるいは合成抑制、にどのように関わるのか。糖鎖変化を起こす上流のメカニズムは何かなどの研究への発展を期待したい。
- ・ 加齢に伴う生理的脳機能変化の研究は、病理学的研究と並んでゲノムを中心にすえた研究に勝るとも劣らない重要な研究であり、今後も継続すべきである。
- ・ 継続の必要性は高い。
- ・ 今後取り組む課題、方向性は明らかにされている。
- ・ まだ時間がかかる研究内容と思う。方向性に問題はないと思う。
- ・ 本分野はさらに発展する可能性があり、研究を継続するべきである。

6. 総合評価

5点 × 1名

4点 × 4名

平均 4.2点

- ・ 老化ゲノム機能チームは糖鎖研究において世界的な成果を挙げている。一方で、タンパク質の糖鎖修飾を中心にすえた現在のアプローチが老化の解明に役立つ可能性についてより深く考えるべきである。糖鎖変化が老化を進めているとしたら、それを引き起こすより根源的な原因は何か。その原因は他の変化も引き起こしていないか。もしそうなら糖鎖変化は二次的な加齢変化の一つに過ぎないことになり、より根源的な原因に注目した研究が必要となろう。
- ・ 総合評価は高い。
- ・ 研究費の採択など実績は高い。
- ・ 施策に関しても十分対応していると言える。
- ・ 研究目的に向かう上での基礎的な成果が蓄積されてきた印象を受けた。
- ・ 医学生物学全体に対する貢献度の高い研究成果がえられた。今後も発展する可能性が大きい分野である。

7. 評価を終えて

- ・ タンパク質糖鎖に関する基礎的研究では極めて優れた成果をあげている。一方で、得られた成果と老化との関連が明確でないように思われる。老化の本質に結びつく発展、さらには糖鎖異常を中核にした老化学説を提唱できるような貢献を期待したい。
- ・ 老化とフクチンとの関連性は難しいと考える。あくまでも老化と糖鎖についての具体的な提案がみえない。その点を改善点としたい。
- ・ 東京都が文化都市であるためには、基礎的な研究への投資が必要である。たとえ、本研究のように書類上の研究の目的を超えて、広い分野に影響を及ぼす研究成果が科学を発展させてきた。したがって あまり都の施策への還元や経済効果に重点をおくべきではない。

健康長寿ゲノム探索研究チーム リーダー 田中 雅嗣	4チーム中 1位	総合評価平均 (5点満点) 4.4点
------------------------------	----------	-----------------------

1. 研究成果 5点 × 1名 4点 × 4名 平均 4.2点

- ・ いずれのグループも研究目標をよく達成したといえる。
- ・ 抗酸化酵素Mn-SODあるいは低酸素応答因子の欠損によって線虫の寿命が延長するという予想外の結果を得て、寿命決定におけるこれらのタンパク質の役割に関して重要な問題を提起した。また無重力の宇宙環境下というユニークな条件で線虫の老化を研究し興味ある知見を得た。
- ・ 100名を超える105歳以上の超高齢者のミトコンドリアゲノムの塩基配列を決定し、特定のハプログループの頻度が高いことを発見した。さらに各種生活習慣病の罹患性とハプログループの相関性を明らかにした。
- ・ 数千名の高齢者に対して運動が種々の健康パラメータに及ぼす影響を加速度センサー付き体動計を用いて調べ、健康維持に必要な運動処方提案している。
- ・ 遺伝子の多型が、肥満、高脂血症、脳血管疾患に関連することや、脳梗塞罹患リスク予測に有用であること等の多くの知見が得られた。
- ・ 達成度は高い。ミトコンドリアゲノムの多型に注目したプロジェクトは世界でも多くはなく、その独創性の高いコンセプトは十分特色のあるものと言える。
- ・ 学術的な知見は、ある特定のハプロタイプは長寿に関連することを見出している。
- ・ 経済的な具体的な波及効果は十分とは言えないが、東京都の高齢化社会に向けた施策に関しては効果を見出している。
- ・ 外部評価に関しては、不明である。
- ・ トレハロースやインスノ35の研究には今後の経済的な効果も期待できそうな印象を受けた。
- ・ 超百寿者やメタボリックシンドローム患者のミトコンドリアゲノム解析を行い、貴重な知見を得た。

2. 研究又はプロジェクト組織としての機能発揮度 5点 × 1名 4点 × 4名 平均 4.2点

- ・ 多くの外部資金を獲得して優れた研究成果を上げている。
- ・ B系の疫学チームとの共同研究を行い、基礎研究と実生活における健康維持に貢献している。
- ・ 外部研究資金の積極的な獲得を行うことにより、少数構成のチームではあるが、研究成果を上げている。
- ・ 効果のバランスは問題ないと言える。
- ・ 他部門と連携は十分とは言えない。
- ・ プレゼンや報告書からは評価できる。
- ・ 多くの研究費を獲得し、効率的に研究を発展させた。ブレインバンクなど他部門や、他施設との共同研究が多い点も評価できる。一件、かけ離れて見える中之条研究や線虫の研究もそれぞれ、遺伝子研究のフィールド、ヒトでの研究との相補的研究として チームの中で機能している。

3. 成果の発表 5点 × 1名 4点 × 4名 平均 4.2点

- ・ 論文、学会発表は学術的に優れたものが多く、質の点でも量的にも十分である。
- ・ 論文、学会発表の量質は十分である。
- ・ 論文発表、学会発表、著書ともに十分と言える。
- ・ プレゼンや報告書からは評価できる。
- ・ 論文の質、量とも評価できる。

4. 普及・還元状況 5点 × 1名 4点 × 4名 平均 4.2点

- ・ 公開講座、市民講演会のみならず都職員や中学生も対象にした集まりを通じて研究成果の紹介に努めている。
- ・ 公開講座等だけではなく、東京都職員や中学生を対象とした講演会等を実施している。
- ・ 個人における生活習慣病の発症リスク等が予測できるシステムを構築を行った。
- ・ 長寿に関して特化しており、施策に関しては還元されていると考える。
- ・ 適切に成果を普及している。
- ・ 都民への普及活動は十分とは言えない。
- ・ マスコミに関しても同様である。
- ・ プレゼンや報告書からは評価できる。
- ・ 本研究チームは、本研究所に最もふさわしい成果を上げており、本研究所の存在意義を都民にアピールした意義は大きい。一般人を対象とした著書やマスコミを通じて行った啓蒙活動も影響力があったと思われる。

5. 今後の展開と方向性について 5点 × 2名 4点 × 3名 平均 4.4点

- ・ 老化メカニズムで中心的役割を果たしていると多くの研究者が考えているミトコンドリアに関して、世界をリードするデータベースを構築公開しており、独法化後も引き続き研究を行う意義は大きい。
- ・ 老人医療センター病理部や慶応大学医学部老人内科との共同研究を通じて、長寿の遺伝的背景や老年病とミトコンドリアゲノム多型との関連研究は老年医学の重要な課題であり、是非継続していただきたい。
- ・ ミトコンドリアにおけるレドックス制御という基礎研究は一見地味ではあるが、現在高齢者の健康維持に役立っている方策も過去の基礎研究の上に成り立っていることを考えると意義のある研究である。
- ・ ミトコンドリアに関する、データベースを構築する等、独法化後においても継続して研究を行う必要性は高い。
- ・ 継続の必要性は高い。
- ・ 今後取り組む課題に関しては明らかにされている。
- ・ すぐに成果が出る性質ではないと思うので方向性は特に問題はないと思う
- ・ 今後さらに発展が期待される分野であり、重点化して拡充継続することが望ましい。

6. 総合評価

5点 × 2名

4点 × 3名

平均 4.4点

-
- ・ 老化の基礎生物学ならびに老年医学に多大な貢献をしている。
 - ・ 総合評価は高い。
 - ・ 妥当な成果が得られている。
 - ・ 都の施策に合致している。
 - ・ 全体を把握するのはプレゼンの時間が短かった印象を受けたが、総合的には評価できる内容と思った。
 - ・ 本研究所の名前に最もふさわしい成果を上げているチームであり、さらに研究を発展させ、国内外に加齢に関する研究の重要性をアピールしてほしい。

7. 評価を終えて

-
- ・ チームメンバーは他のチームに比べて少数ではあるが、優れた成果を挙げている。長年にわたって重要な貢献をしながら正規の研究員でないメンバーがいるという状況は改善していただきたい。
 - ・ 都の施策に合致していると考え。一方で単に現象論的に成っている感も否定できない。現象的知見から具体的に新規薬物の開発に向けた検討が望まれる。

認知症高齢者に関する総合的研究
リーダー 丸山 直記

総合評価平均
(5点満点) 4.2点

1. 研究成果

4点 × 5名

平均 4.点

- ・ 基礎研究から社会学的フィールド研究まですべての研究グループでバランスよく目標達成ができたと思われる。
- ・ 学術的知見は各研究者が属する研究グループの実績としてすでに評価した。
- ・ 認知症の予防・診断・治療および介護に関する総合的な取り組みをして成果をあげているので、医療および介護費用の節減が期待され有形無形の経済的な効果が得られるものと思う。
- ・ ADの早期診断薬やバイオマーカー開発、カルニチンの認知症抑制機能等が示唆され、多くの成果があった。
- ・ 達成度は高いと言える。
- ・ 学術的な知見は得られていると判断する。
- ・ 経済効果は、現時点では期待できない。
- ・ 進捗に評価されたかは不明。
- ・ プロジェクトの項目が多く、プレゼンでは評価が難しかったが、報告書の内容からは評価できる。
- ・ 医学生物学研究、社会医学研究から臨床研究まで幅広い分野で十分な成果がえられた。

2. 研究又はプロジェクト組織としての機能発揮度

4点 × 4名

平均 4.点

- ・ 研究予算についてはデータが提示されていないので評価できない。
- ・ 部門間の協力はよく行われており、老人研・老人医療センターならではの総合力が発揮されている。
- ・ チーム間、老人医療センターとの連携が副所長を中心に適切に行われていると思う。
- ・ 予算については問題ないと考える。
- ・ 認知症プロジェクトは十分連携が得られていると考える。
- ・ プロジェクトの項目が多く、プレゼンでは評価が難しかったが、報告書の内容からは評価できる。
- ・ 予算に関する説明資料がないので評価しなかった。

3. 成果の発表

4点 × 3名

平均 4.点

- ・ 論文、学会発表の量質は十分である。
- ・ 論文発表、学会発表、著書ともに十分と言える。
- ・ プロジェクトの項目が多く、プレゼンでは評価が難しかったが、報告書の内容からは評価できる。
- ・ 参加研究者の名前を見ると質量ともに優れた論文が発表されたと考えられるが 資料がないので評価しなかった。

4. 普及・還元状況 5点 × 4点 × 3名 3点 × 2名 平均 3.6点

- ・ 成果の還元、都民への情報発信などよくなされている。
- ・ 学会、論文だけではなく、認知症高齢者プロジェクト情報の発行やTVへの出演、雑誌等の一般都民が目につけることができる媒体を活用して普及している。
- ・ 都の施策に対する還元は十分とは言えない。
- ・ 成果の普及活動は十分と言える。
- ・ 市民、都民に向けた情報発信が成されている。
- ・ 新聞などに取り扱われている。
- ・ 内容の幅が広いのですべてで成果普及が十分にされているかの評価は難しいが、報告書からはある程度評価できると思う。
- ・ 都の施策に反映できる成果はあがっていると思われるが、都がどのように成果を利用しているのか説明では明らかでなかった。都民にたいする広報は、施設全体でシステムティックに行われておらず、不十分である。

5. 今後の展開と方向性について 5点 × 2名 4点 × 3名 平均 4.4点

- ・ 認知症は高齢者の病気の中でも最も重要なもので、本長期プロジェクトのような自然科学系と社会科学系が一体となった総合的取り組みが是非必要であり、継続を強く望む。
- ・ 独法化においても、認知症研究は最も重要なものの一つであり、一層の自然科学系と社会科学系の組織的な取り組みを行い発展してもらいたい。
- ・ 研究の必要性は高い。
- ・ 課題、方向性は適切と考える。
- ・ 研究内容全体はまだ時間がかかるテーマのため、継続性が必要と思う。
- ・ 方向性に問題はないと思う
- ・ テーマはどれも、本研究所が研究すべき内容であり、今後も継続が望ましい。

6. 総合評価 5点 × 1名 4点 × 4名 平均 4.2点

- ・ 独法化後は異なるレベルの研究の相互理解を深め総合研究としての特徴をさらに生かせる体制を作っていたきたい。
- ・ 都民、国民への成果の普及、教育活動はよくやってきたと思うが行政関係者に研究の意義を理解してもらうことも重要である。
- ・ 総合評価として高い成果をあげていると考える。
- ・ 成果も普及も妥当と考える。
- ・ 予算規模についての判断はできないが、総合的に評価できる。認知症の問題はどうしても長期の横断的で継続的な研究でないと成果はでにくいので、この期間での成果としては妥当と思われるが、さらに期間の延長が必要と感じた。
- ・ 社会医学、医学生物学から臨床までが互い連携して研究を遂行するシステムがうまく働いており、国内には他に類を見ない研究であるといえる。その過程で、他分野にまたがる重要な発見も多数なされた点も高く評価できる。長期プロジェクト研究とコア研究で研究内容が重なっているものがあり、研究費の配分システムが、わかりにくかった。

7. 評価を終えて

- ・昨年度からこのプロジェクトを率いることになったプロジェクトリーダーだが、A系からB系までの多岐に亘る組織、課題をよくまとめておられると思う。今後も組織が一丸となって課題に対応できるよう努めていただきたい。
- ・認知症の問題は、都の施策に合致しており、連携も上手く機能していると言える。
- ・本研究のような総合的長期プロジェクトにおいては基礎研究から日常生活での実践までを俯瞰してリーダーシップを発揮できる体制が必要である。人材の配置や予算配分の点で行政の役割も大きい。独法化にともなって、世界トップレベルの長寿国におけるユニークな老化の総合研究機関が以前にも増して高齢社会に貢献できるよう、行政側の対応にも期待したい。

- ・老年学公開講座は、一般の高齢者向けに老人病研究への関心を広げるうえで、機能していると思うが、個々の研究プロジェクトの成果については、公開形式でのシンポジウムなどをもっと多く開き、サイエンスポータルなどのサイトのイベント欄などで日程の告知を進めてほしい。老人研のサイトでも関連研究のシンポジウムや学会の日程情報が載っていると情報の公開の促進につながると思う。

研究内容の評価は本来、その分野に詳しい外部の人の意見を複数聞いてでない正確な評価はできないと思う。

自分のような研究者でない立場の者が評価するとしたら、複数の専門家が評価してきた内容の報告を受けて、研究者とは離れた視点でそれが受け入れられる内容かどうか意見を述べるというような形式でないと、よくないと思う。今回のように研究報告書の内容とプレゼンだけで評価するというのは、無理があると思う。こうした形式で自分のような立場で評価できるのは、明らかに無駄と思える方向に向かいつつある研究なのかどうかという点ぐらいだ。今回の評価に参加して改めてその思いを強くした。そのため、評価の点数はプレゼンや報告書で明らかな問題点が見えてこない限り、興味が持てた研究内容であれば、4という評価しかつけられなかった。外部の専門家以外の意見を評価に反映させるという意図は重要とは思いますが、今後その方法については検討すべきだと思う。

社会科学系（B系）報告

コア研究（B系）及び長期プロジェクトの事後評価について

外部評価委員会委員長

柴田博

東京都老人総合研究所は、平成 21 年度に地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター研究所として新たなスタートを切ることになる。

本委員会は、この独法化に伴って今年度をもって終了することになる、コア研究及び長期プロジェクトについての、事後評価を行った。

事前に提出された研究報告書と委員に対して行われたプレゼンテーションを基に、研究所が定めた評価基準に従って行った評価を、委員会として、ここにとりまとめたので報告する。

なお、評価の基礎となった「コア研究別評価票」には、各委員の評価意見をできる限り原文のまま掲載したので参考にいただきたい。

さて、各委員からの報告を見ると、社会科学系全体が組織一丸となって取り組まれているという研究や世界的な高水準の研究であるという高い評価を得たものも多く、全体としては、今後も継続が妥当と評価される研究が多かった。

一方では、研究所として一層の工夫や改善が検討されるべきという意見として例えば、

- 個々の研究課題をチーム全体で取り組む意義が不明確であることから、チーム統一の研究目標を絞り込み、到達目標を明確にすることが必要であるとされた研究
- オリジナリティのある研究成果がみられないと評価された研究
- 適切な研究方法を採用していないためその研究成果が評価されない研究
- 研究方法の再検討しなければ継続しても意義がないと評価された研究

等があった。

このような評価を踏まえて高い評価は引き続き継続するよう努めることはもちろんのこと、平成 21 年 4 月から新たな研究体制で、研究活動が展開されることから、新しい体制を生かした研究をも行っていく必要がある。

特にこれまでのように社会科学系研究と自然科学系研究の協力関係を深めるだけではなく、独法化後による医療と研究の一体化のメリットを生かし、病院部門との密接な連携を図ることにも一層努力が必要と考えられる。

この報告が今後の研究活動に生かされ、高齢者の健康増進と健康長寿の実現を目指し、より充実した研究所となるよう期待している。

自立促進と介護予防研究チーム リーダー 本間 昭	3チーム中 2位	総合評価平均 (5点満点) 3.5点
1. 研究成果 5点 × 1名 4点 × 2名 3点 × 2名 平均 3.8点		
<ul style="list-style-type: none"> ・ 身体的機能低下予防に関する研究はかなり 成果が出ている。しかし地域型認知症予防に関してはオリジナリティがある成果がない。 ・ 認知症の介入研究はRCTでないため学術的評価は低い。サンプルを減少し期間を短くしてもRCTにすべきである。 ・ 身体機能低下予防の栄養+運動プログラムに期待できる。 ・ 介護予防は国の政策として行われているが、その長期的な効果評価はほとんど行われていない。学術的、実践的に有益な知見が得られたと思われる。 ・ AACDに対する長期追跡研究、介入研究のデータは少ないと思われ、その意義は大きい。進行遅延に結びつく可能性を持つ知見が得られたと思われる。 ・ 研究目標の達成度は十分高いと思われる。 ・ 社会(国民)に広く啓発するに値する結果が得られていてすばらしい。気になる点は転倒、尿失禁、認知症などに対する介入効果のメカニズム(←非常にむずかしい!!)が解明できていないことである。 ・ 経済的波及効果までは、言及できない。期待はできるが、あいまいさが残っている。 ・ 外部評価結果が研究の進捗に活用されたかについては、おおむね活用されていると思われる。 ・ 歩行速度が遅い群の約半数が有症であり、健康的な人もいる事実をも伝えていって頂きたい。 ・ 転倒予防は運動の効果なのか、教室全体の効果なのか、特定化は難しいのではないか。 ・ 尿失禁、筋力アップや腹部肥満の改善が有意な貢献になっているとの証明はできるか疑問である。 ・ 介護予防、認知症予防とも、どのような高齢者にどのような介入がどのような効果をもたらすのか、ということをはっきりと示した意義は大きい。 課題は、引きこもり、介入拒否など、これらの研究の恩恵に浴すことのできない高齢者をいかにひきこむか。自治体など介護予防の現場では、こうした高齢者の存在を認識しながらもなかなか手をつけられないのが現状。課題に加えて研究を継続してほしい。 認知症予防に関しては、さまざまある機能のどの部分にどんな介入が効果的か、今後も研究を進めてほしい。費用負担の軽減が今後一層重要になると思われるので、無駄のない手法が求められると思う。 ・ 経済的波及効果は期待できる。 		
2. 研究又はプロジェクト組織としての機能発揮度 4点 × 3名 3点 × 1名 平均 3.75点		
<ul style="list-style-type: none"> ・ 認知症の介入研究は費用がかかり過ぎている。 ・ 認知症予防に関して他の団体とのコラボレーションは高く評価できる。 ・ 多数の外部資金を獲得した点は評価できる。介護予防というまとまりで、二つのチームの間にもっと連携があってもよかったのではないか。 ・ 研究予算との効果的な執行、また効果のバランスは良好と思われる。 ・ 他部門との連携協力は十分図られ、研究所の総合力が生かされたと思われる。 		

3. 成果の発表 5点 × 2名 3点 × 2名 平均 4.点

- ・ 身体機能低下予防に関しては、パブリケーションは進んでいる。しかし、認知症予防に関しては不十分である。
- ・ 多数の論文を発表し、学術に貢献した。
- ・ 論文発表は、質・量ともに十分である。
- ・ 学会発表、著書等についても良好である。

4. 普及・還元状況 5点 × 1名 4点 × 2名 3点 × 1名 平均 4.点

- ・ この面ではかなり進んでいる。しかし、エビデンスの固まっていない情報を普及させるリスクがないか否かを十分検討すべきである。たとえば脳血流を増加させるような精神状態が認知症の予防に結びつくというエビデンスはまだ存在していない。
- ・ 介護予防は、緊急対策室と連携して適切におこなわれていると考える。
- ・ 認知症は、一般に関心の強い事項であり、科学的なエビデンスをわかりやすく一般に知らせる努力は非常に重要であろう。認知症発症遅延について根拠のない言説が世間でひとり歩きしているのは嘆かわしい。
- ・ 一般都民(国民)の目線に合わせた提案を心がけて頂きたい。
- ・ 適切に成果を普及しているか、一般都民に向けて広く情報を発信できる手段・方法が取られているかについては、良好だと思われる。
- ・ マスコミへの取り上げは、十分である。
- ・ 世田谷区の受託調査でもある認知症遅延化プログラムに関する研究の成果の活用、今後の展開がみえなかった。

5. 今後の展開と方向性について 5点 × 1名 4点 × 1名 3点 × 2名 平均 3.75点

- ・ 身体機能低下の研究はこのまま進めてよい。しかし認知症予防に関しては対象の選定、介入方法など再考しなければ継続しても意味がない。
- ・ いずれのチームについても、国レベルでもデータはいまだにあまり多くないテーマであり、将来も重要性が高い研究である。
- ・ 研究継続の必要性は高い。
- ・ 今後取り組むべき課題、研究の方向性は明らかにされており、適切である。
- ・ 学術というより実践に生かされて成果のでる研究内容だと考える。
- ・ 研究と実践という、新しい独法でのコンセプトのもと、そうした視点から再構築・強化が必要ではないか。

6. 総合評価 4点 × 2名 3点 × 2名 平均 3.5点

- ・ 認知症予防の研究成果が不十分である普及還元に関しては十分評価が出来る。
- ・ 政策立案上の重要性が高いテーマであり、将来、病院中心の組織になっても、こうした研究は都、さらには国全体にとって重要であろう。今後の発展を期待したい。

7. 評価を終えて

- ・ 研究所は今後難しい状況に置かれると思うが、心理・社会的要因を扱う社会老年学研究は研究所が日本の中心であったし、将来もそうであってほしい。実践性ばかりを重んじ、基礎研究が軽視されていくのはわが国全体の傾向であるが、近視眼的できわめて危険である。研究所においてはこのようなことが起こらないようにしていただきたいと願う。
- ・ 認知症に効果ありと言及するよりも、注意機能、言語機能など、それぞれに効果が○△×といった結論が導き出せないか？また、その成果をもたらす要因の特定化を期待したい。何についても効果ありと結論するのか、効果が期待できないと結論した上で次のさらなるステップアップをねらってはどうか？RCTデザイン(トライアル)を行うことのマイナス面(倫理上)についても検討されているか？コントロール群の設定については、罪の意識を感じないか？効果なしをみこして扱うことになる。
- ・ チームごとにフォーマットが統一されていない。4(特に外部資金獲得)、5(業績)、6(普及・還元)については、書く人によらず、書き方を統一するような指示を出していただきたい。たとえば、4と5ならば、主任研究者(筆頭著者)がチーム員であり、今回の評価に直接関連するものに限るとか、「他○件」という表記は止めていただくとか、工夫がほしい。あるいは逆に、合計金額(件数)は書かないで主要なもの10件のみに限定して記載する方針も考えられる。
- ・ このチームだけ発表が2人で、分かれていたのはなぜかよくわからなかった。

社会参加とヘルスプロモーション研究 チーム リーダー 新開 省二	3チーム中 1位	総合評価平均 (5点満点) 3.75点
--	----------	------------------------

1. 研究成果 5点 × 2名 4点 × 2名 3点 × 1名 平均 4.2点

- ・ 全国サンプルおよび地域の学際的縦断研究の成果が実っている。とくにJAHEADの知見は後期高齢者に関するQOL向上の手だてを確立する上で大きな貢献をしている。
- ・ 学術的な知見は得られている。
- ・ 経済的波及効果は、予防法の確立を通じて効果がある。
- ・ 社会的要因と健康との関係は従来あまり検討されてこなかったが、本チームでは介入研究も行われており、独創性が高い。
- ・ 研究目標の達成度は、十分である。非常に意義の高い研究が遂行されており、すばらしい成果をあげている。
- ・ 経済的波及効果は、期待したい。
- ・ 外部評価結果が研究の進捗に活用されたかについては、良好であると思われる。
- ・ 「虚弱」研究は、介護予防の必要性を一般に認知させるためにも非常に重要。虚弱の定義、虚弱チェックリストの妥当性についてさらに検証を進めてほしい。また「虚弱」について、そのような研究があることについては一般都民にほとんど知られていないのではないか。研究成果を還元するために研究所や都として広報活動に力を入れるべきではないか。
- ・ 医療費、介護費の削減効果は、介護保険制度の改定に間に合うよう、虚弱の有無だけではなく、細分化してさらに深く調べてほしい。
- ・ 社会参加については、規定要因の解明が8割方達成されたという。今後はボランティアの展開・評価より、ひきこもりがちで社会参加できない高齢者へのアプローチを研究対象にするべきではないか。
- ・ 運転免許断念に関する研究を断念したのは非常に残念。担当研究者が転出したからやめるのではなく、免許更新時のスクリーニングプログラムにも関わっている研究所として、続けるべきではないか。認知症ドライバーを抱えて悩んでいる家族は多い。
- ・ 主要課題である「大都市高齢者」についての研究成果について説明がなかったため、達成度を少し低くした「大都市」=23区の特性などがあつたのだろうか。あるいは「大都市」という冠はそれほど気にする必要がないのであろうか。
- ・ まだ研究の最終まとめには到達していない感がある。

2. 研究又はプロジェクト組織としての機能発揮度 5点 × 1名 4点 × 3名 平均 4.25点

- ・ 研究予算とのバランスがよい。
- ・ 他部門、外部機関との連携が進んでいる。
- ・ 多数の外部資金を獲得した。
- ・ 研究予算との効果的な執行、また効果のバランスは良好と思われる。
- ・ 十分図られたか否かまでは言及できないが、その可能性の高いことが読みとれる。研究所の総合力が発揮されていると思う。

3. 成果の発表 5点 × 1名 4点 × 2名 3点 × 1名 平均 4.点

- ・パブリケーションは相対的にみて十分。満足すべきものである。
- ・多くの論文を発表した。また、学会賞も獲得した。
- ・論文発表は、質・量ともに十分である。
- ・学会発表、著書等についても良好である。

4. 普及・還元状況 5点 × 1名 4点 × 1名 3点 × 2名 平均 3.75点

- ・本プロジェクトで得られた成果は今後、施設づくりにそのまま活用できる。また都民への普及・還元も満足すべきものである。
- ・なかなか還元が難しい面もあるが、科学的な知見を一般にわかりやすく伝える努力は必要であると思われる。
- ・都の施策に対する成果の還元は十分、また、積極的な提案もなされている。
- ・適切に成果を普及している。
- ・一般都民に向けて広く情報を発信できる手段・方法が取られている。
- ・マスコミに取り上げられている。

5. 今後の展開と方向性について 5点 × 1名 4点 × 2名 3点 × 1名 平均 4.点

- ・このままの研究デザインで、更に継続すべきである。但し、JAHEADの研究には若年サンプルの補充を常に行っていくことが求められる。
- ・元気な前期高齢者は今後ますます増加するため、その対策は将来的に重要性が高い。
- ・研究継続の必要性は高い。
- ・今後取り組むべき課題、研究の方向性は明らかにされているように思われる。今後は一般都民(国民)に向けた具体的な提案をしていって頂きたい。
- ・「虚弱」のCLの妥当性、概念、今後の活用が正直、よくわからないので、今後の総括、展開をみたい。
- ・大都市高齢者の社会参加は、行政施策等に結びつくプログラムや提言を期待する。

6. 総合評価 4点 × 3名 3点 × 1名 平均 3.75点

- ・研究のオリジナリティもその応用化もバランスよく企てられており、大切にすべきプロジェクトである。
- ・少人数でも健闘されておられ、結構だと思う。引き続き努力を期待する。
- ・研究期間や予算規模に照らして妥当な成果が得られている。
- ・年齢、地域、居住形態、職業など多要因を考慮したグループメイドの還元方法の発展を期待したい。

福祉と生活ケア研究チーム リーダー 高橋 龍太郎	3チーム中	3位	総合評価平均 (5点満点)	3.25点
-----------------------------	-------	----	------------------	-------

1. 研究成果 4点 × 2名 3点 × 3名 平均 3.4点

- ・ 研究目標自体に本研究所が行うべき必然性がやや欠如している。また、目標と方法(サンプリング、調査内容)の間の整合性が十分でない。
- ・ 個々には重要なテーマだと思いが、チーム全体としての目標がよく理解できない。したがって、評価も困難であった。また、これに関連して、「成果の発表」欄の「他」はよくないと思う。これだけ多様なテーマを扱っておられるのであれば、テーマごとにまとめて示すとか、主要テーマに直接関連する代表的な業績を示すとか、提示に何らかの工夫をしていただきたいと思う。少なくとも、(学会発表ではなく)論文数は知りたかった。
- ・ 3つの研究課題の総体としての意義づけ(ロジック構築)がわからなかったが、各課題の重要性は認識できた。
- ・ 経済的波及効果は期待したいが、まだ道のりが長いと思われる。
- ・ なぜこの3つのテーマの組み合わせなのかわかりにくい。目標設定をもう少し絞るべきではなかったか。
- ・ 介護保険制度に関する検証は制度改定を前に時宜にかなったもの。住民団体、民間グループなどからも検証は行われているが、国とは別の公共の組織による検証として価値がある。06年改正後の検証がまだ不十分のようなので、注力してほしい。とくに費用負担、家族の介護時間など。
- ・ 健康と幸福のエイジングモデルは、研究テーマの設定を絞り、それに合わせた調査の方法を見直す必要があるように思うが、ユニークであり、高齢人口の増加する社会で、介護の質の向上にも関わるテーマなので進めてほしい。
- ・ ミストサウナの調査は都の研究所で対象とするテーマなのか疑問。
- ・ 3本の柱、それぞれの到達目標、さらには、トータルな到達目標がよくわからなかった。よって、目標の達成度がよくわからない。また、学術的知見・経済波及効果という点からの達成度もややわからなかった。

2. 研究又はプロジェクト組織としての機能発揮度 5点 × 1名 3点 × 2名 2点 × 1名 平均 3.25点

- ・ プレゼンテーションで他の部門と協力関係が述べられていない。
- ・ 外部資金獲得については他と比べて十分ではない。また、チーム全体としての一貫性についてやや不十分な点がある。リーダーのみが孤軍奮闘している印象を受けた。
- ・ 研究予算との効果的な執行、また効果のバランスは良好と思われる。
- ・ 他部門との連携協力は十分図られ、研究所の総合力が生かされたと思われる。

3. 成果の発表 5点 × 1名 4点 × 1名 3点 × 2名 平均 3.75点

- ・ 基礎的な知見の論文から施策、立案に関する論文まで十分公表されている。
- ・ 業績リストの「他」というのがよくわからないが、他と比べるとやや不足かもしれない。しかし、学会賞を数多く獲得している点は評価できる。
- ・ 論文発表は、質・量ともに十分である。
- ・ 学会発表、著書等についても良好である。

4. 普及・還元状況

4点 × 1名 3点 × 3名 平均 3.25点

- ・ 行政施策に有用な成果物とするためには、分散的に論文を公表するのみでなく、実用化するためにデータを加工して公表すべきである。
- ・ 一般に関心が強く事項であり、科学的なエビデンスを一般に知らせるのは重要であろう。
- ・ むずかしい課題に取り組まれており、価値が高いが、成果の普及に具体性を増してほしい。
- ・ 各研究員の方が、それぞれに高い専門性を持ち、都の施策への協力、支援を行っていることはわかるが、この研究の成果の還元提案ということではないのでは。例えば「介護保険の諸課題の検証」研究結果が十分施策還元されているわけではない。

5. 今後の展開と方向性について

4点 × 1名 3点 × 3名 平均 3.25点

- ・ 研究の継続は必要であるが、もう一度研究目標を整理し、本研究所でなければ成し得ない研究に凝集すべきである。個別大学が教育のかたわら行っているような研究では本研究所の行う意味が希薄となる。
- ・ 介護・福祉にかかわる実践的な課題が多く扱われており、重要性は高い。
- ・ 3つの課題の相互連携性を見直し、優先順位をつける(1つを削除する)などの検討を重ねた上で、次のステップに進んでいってはどうか？
- ・ どのような手法で何を行おうとしているのか。三本の研究をどう結びつけるのか。尺度活用の見込みはあるのか。以上、疑問であり、今後、整理・再構築していただきたい。

6. 総合評価

4点 × 1名 3点 × 3名 平均 3.25点

- ・ 全国的に看護や福祉の研究レベルは高くない。本研究所は指導的な役割を果たすことが社会から要請されているが、その点に関していま一歩発展することが望まれる。
- ・ 心理・社会・医学とさまざまな専門家から成るようであるが、全体としてのまとまりに欠ける。チーム構成について再検討(あるいはチームとしての統一テーマを持つとか)すべきではないだろうか。
- ・ 研究期間や予算規模に照らして妥当な成果が得られている。
- ・ 普及・還元方法、都の施策・都民ニーズとの関連についての助言・要望等については、さらに努力していただきたい。

中年からの老化予防総合的長期追跡研究(第3期)
リーダー 鈴木 隆雄

総合評価平均
(5点満点) 4.75点

1. 研究成果 5点 × 3名 4点 × 2名 平均 4.6点

- ・過去のTMIG-LISAのフィールドを引き継ぎ、新しい知見を加えて、将来の研究のベースともなっている点、大いに評価できる。
- ・世界的にみても、もっともプロダクティブな研究プロジェクトといえよう。
- ・予知因子についての追跡研究は、わが国では不足している分野であるが、長期研究なので継続することに意義がある。すぐに実践に役立つデータが得られるかどうかはわからないが、学術的に貴重な基礎データが得られたと考える。
- ・研究目標は、十分達成できていると思われる。
- ・非常に価値の高い知見(結果)が出されているが、メカニズムの究明についても努力して頂きたい。
- ・経済的波及効果については、良好と思われる。
- ・外部評価結果が研究の進捗への活用は、良好と思われる。
- ・チェックリストの有効性の検証は意義があった。運動機能の測定との組み合わせなど、改良が望ましい点も示せたので制度改正に生かすよう厚労省に働きかけてほしい。
- ・βマイクログロブリンやビタミンDについても興味深い知見が得られたと思う。次は、投与の方法、対象者など、効果的な介護予防に生かす手法につなげてほしい。
- ・良い研究なのだから成果の還元にもっと力を入れてほしい。テレビや雑誌で健康やアンチエイジングが取り上げられているなか、(情報の正確さで問題になるメディアもあるが)パブリシティに取り組むことはできないのか。
- ・転倒と生命予後の因果関係がいまひとつわからなかった。
- ・これだけ長期に大規模に続いているプログラムは貴重。ぜひ継続するとともに、行動様式・価値観などで異なる後の世代を対象にした調査も行ってほしい。
- ・着実な研究の進捗がうかがえた。基礎医学・フィールド調査・行政施策との連携など、老人総合研究所らしさを発揮した研究だと評価する。

2. 研究又はプロジェクト組織としての機能発揮度 5点 × 1名 4点 × 3名 平均 4.25点

- ・外部資金をよく導入して、それに見合った成果を上げている。
- ・社会系全体として取り組まれているように感じた。また、多数の外部資金を獲得している。
- ・研究予算との効果的な執行、また効果のバランスは良好と思われる。
- ・他部門との連携協力は十分図られ、研究所の総合力が生かされたと思われる。

3. 成果の発表

5点 × 3名 4点 × 1名 平均 4.75点

- ・ $\beta 2$ マイクログロブリン、ビタミンDなどパブリッシュされている論文の質も高い。パブリケーションの量も十分である。
- ・ 多数の論文が発表されている。
- ・ 質・量ともに十分高く、国内外へのインパクト(影響)も大きい。
- ・ WHOの運動との連携、多数の専門誌への発表など、積極的な発信が評価できる。

4. 普及・還元状況

5点 × 1名 4点 × 2名 3点 × 1名 平均 4.点

- ・ 施策に対する貢献度はまだ十分ではない。これからの研究結果のイノベーションに期待がかかる。
- ・ 基礎研究なのでなかなか還元が難しい面もあるが、科学的な知見を一般にわかりやすく伝える努力は必要と思う。
- ・ 都の施策に対する成果の還元は十分、また、積極的な提案もなされている。
- ・ 適切に成果を普及している。
- ・ 一般都民に向けて広く情報を発信できる手段・方法が取られている。
- ・ マスコミに取り上げられている。

5. 今後の展開と方向性について

5点 × 1名 4点 × 3名 平均 4.25点

- ・ 今後、介入研究の結果などを老化予防の指針づくりにイノベイトするような研究も付加すべきである。
- ・ 長期縦断研究であるため、行政的な評価は高くないかもしれないが、このような研究はわが国にほとんど存在せず、学術的にきわめて貴重なデータが得られることが期待されるので、組織が変わったとしても継続する必要があると思う。
- ・ 研究継続の必要性は高い。
- ・ 今後取り組むべき課題、研究の方向性が明らかにされており、適切である。
- ・ 老研が長期にかかわっている、まさに「財産」のような研究だと思うので、今後の研究に期待する。
- ・ 今後は、臨床とも連携しつつ、これまでとまたちがう視点からのアプローチが期待できるのでは。

6. 総合評価

5点 × 3名 4点 × 1名 平均 4.75点

- ・ これまでの研究成果は大いに評価できる。
- ・ 都の研究所がこのような基礎研究をおこなう必要があるのかという議論もあるかもしれないが、わが国の老年学研究の歴史を考えると、研究所が中心になって日本の基礎研究を担ってきたのはまぎれもない事実である。研究環境が変わることが予想されるが、引き続き今後の健闘を期待する。
- ・ 限られた研究期間や予算の範囲内という制約があるなかで、質・量ともに高い成果が出されている。研究所の誇りとして頂きたい。プレゼンテーションは非常に良かった。ロジックの展開もしっかりしていて感心した。B2-mの有用性について、横断的かつ縦断的検討を重ねて頂きたい。ビタミンDについて季節や居住形態に加えて、食事や運動など他の要因を絡めたライフスタイル(行動変容)への導きを示して欲しい。